

〔教育実践研究〕

手術室実習を通して学生が考察した 「手術療法を受ける人とその家族への看護のあり方」

北 村 直 子 平 岡 葉 子 奥 村 美 奈 子

“Perioperative Nursing for Patient and Family” that Students Have Learned from Practice in Operating Room

Naoko Kitamura, Youko Hiraoka, and Minako Okumura

I. はじめに

本学の成熟期看護学実習では「手術療法を受ける患者とその家族への看護」を学ぶために手術室での実習（以下、手術室実習）を行っている。この実習は一般病院での実習期間 11 日の中の 1 日を当てて実施している。実習時間が 1 日と短く、また、一般病院実習では受け持ち患者を周手術期患者に限定していないため手術室実習のほかに手術を受ける患者への看護を実際的に学ぶ機会がない学生もいる。

実習開始初年度の手術室実習レポートの分析結果¹⁾では、この実習において学生が手術室における「患者を中心とした看護」を学ぶことが十分に可能であるが、「プライバシーを配慮する看護」「意志・意向を尊重する看護」といった看護師が配慮として行うことが多い看護や「術後にケアを継続させる看護」といったその場で患者に直接働きかけない看護について実習記録に記載されにくいことが明らかとなっていた。実習開始当初は、1 日の手術室実習で学生が何を体験できるかということを把握するために、実習記録では、実際に実習中に見学できたもしくは体験できた看護援助とその目的・意図の記載を求め、また実習で学んだことを自由に記載する欄を設けていた。このため、学生は手術室内で行われていた看護のみを実習の学びと捉え、「手術療法を受ける人とその家族への看護」を学ぶことを実習の課題と捉えことができず、学びの範囲を広げ、深めることができていなかった。

また、手術室実習の場で学生が見学できたもしくは体験できた看護援助を教材として「手術療法を受ける患者とその家族への看護」のあり方を学生に考察させるという明確な姿勢は実習開始当初教員自身に確立されておらず、のちの教育実践研究活動や実習の自己評価の活動によって培われてきたように思う。

したがって、実習開始翌年からこれまでの 4 年間においては、学生が体験を通して「手術療法を受ける患者への看護」を考察することが実習の課題であることを教員間で共通認識し、学生へもこの課題が伝わるような記録用紙の改善などに取り組んできた。

このような取り組みを経て実施している近年の手術室実習で学生が考察した「手術療法を受ける人とその家族への看護のあり方」を明らかにすることは、今後の手術室実習指導のさらなる改善を検討するために必要であると考ええる。

したがって、本研究は、本学の成熟期看護学実習における手術室実習を通して学生が考察した「手術療法を受ける人とその家族への看護のあり方」を明らかにすることを目的とする。

II. 手術室実習の概要

1. 手術室実習のねらい

手術室実習は成熟期看護学実習の目的・目標のもとで展開されているが、その成熟期看護学実習の目的は、「さ

さまざまな健康状態で生活を営んでいる成熟期の人々への看護実践を通じて、成熟期看護のあり方について理解を深める」ことである。さらに、すべての対象者に共通する目標「成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶ」と、5つの健康課題別に対象者を捉えた目標「健康課題の異なる成熟期にある人とその家族を理解し、看護の役割と特性を学ぶ」の2つの具体的目標が設定されている。手術室実習で学生が関わりをもつ対象者の多くは健康課題「健康の回復過程」にあるため、手術室実習では「健康の回復過程にある成熟期の人とその家族の看護」の学びを深めることが期待されている。

2. 実習方法と実際

学生は成熟期看護学実習の一般病院実習11日のうち、1日を手術室実習にあてる。原則的には一般病院実習での受け持ち患者がその期間に手術を受ける場合には患者の受け持ち学生として患者とともに手術室に入室し、学生としてできる範囲で看護援助を行いながら見学中心の実習を行う。一般病院実習での期間中に受け持ち患者の手術がない場合は、別の患者に依頼し、術前訪問や術前の挨拶など学生と患者が面識をもったうえで見学を中心とした実習を行う。平成17年度の手術室実習では、受け持ちを継続して実習を行った学生は全体の3分の1程度であった。また、実習施設は5つに分かれており、各施設で9～25名の学生が実習し、実習当日に学生は1～3名程度で手術室に入室している。術前訪問の参加については施設によってその実施自体にばらつきがあり、半分程度の学生が参加できている。手術室実習の臨地指導者については固定されている施設と実習日によって異なる施設があり、手術室実習のオリエンテーションは内容や費やす時間に差はあったがどの施設でも実施されている。

Ⅲ. 研究方法

1. 分析対象

手術室実習を終えた本学の3年次生のうち、研究協力が得られた71名の手術室実習記録用紙の「この実習を通じて、手術療法を受ける成熟期の人々とその家族への看護のあり方を考察してください」の記載内容とした。なお、手術室実習の記録用紙はA4サイズ1枚で、原則

的に実習翌日に担当教員に提出を求めている。分析対象とした設問以外に「手術療法を受ける人々の健康問題と課題」「手術療法を受ける人とその家族の手術を受けることに対する理解や思い」「手術室での看護活動とその目的・意図」を記載する欄を設けている。

2. 分析方法

①分析対象の記載内容を読み、ひとつの記述に1つの意味が含まれるように文章を抜き出す。②抜き出した文章を読み返し、学生が考察した「看護のあり方」の内容を表現したものをコードとした。③コードを読み返し、意味内容が類似するものを集めて分類し、意味内容を表す分類名をつける作業をくりかえした。④最終的に得られた大分類を、学生の考察の構造を理解するために、大分類の性質からさらに分類し、その性質を示す名称をつけた。

①から④の分析作業を手術室実習の担当でもあり、周手術期看護学を専門とする教員3名が行い、全員の同意を得ながら分析をすすめた。

3. 倫理的配慮

実習記録を研究に用いることについて、全学生が成熟期看護学実習を終了した後、研究の目的、個人のプライバシーを保障すること、承諾の可否が成績に関与しないことについて文書および口頭で学生に説明し、書面にて同意を得た。

Ⅳ. 結果

71名の学生が手術室記録用紙に記載した「手術室実習を通して学生が考察した手術療法を受ける成熟期の人々とその家族への看護のあり方」から295コードが抽出された。さらに、意味内容の類似性にそった分類は3段階行われ、第1段階では82小分類（本文中〈 〉で示す）に、第2段階では29中分類（本文中《 》で示す）に、第3段階では16大分類（本文中【 】で示す）に整理された。さらに学生が考察した「手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方」の大分類をその性質から〔看護の目的〕〔看護の目標〕〔看護の方法〕〔看護師の姿勢〕に整理した（表1）。

1. 〔看護の目的〕

手術室実習を通して学生が考察した手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方として見出された【患

者の手術や療養に取り組む姿勢を支える】【順調な回復過程を支援する】の2つの大分類が「看護の目的」としてまとめられた。

1) 【患者の手術や療養に取り組む姿勢を支える】

術前訪問や術前オリエンテーションで手術に関する説明を行ったり、医師からの説明時に同席したり、医師と話ができるように調整して《患者・家族が治療を理解できるよう支援する》、患者や家族が手術を決定して主体的に取り組めるように、また術前の気持ちを整えること

で《手術に取り組む姿勢を支援する》、今後の見通しをもったり、安心感が得られるようにして《回復意欲を高めるように支援する》、手術を肯定的に意味づけられるようにしたり、手術結果に満足できない場合に患者の思いに対応するなどして《手術体験の意味づけを支援する》などから成る。

2) 【順調な回復過程を支援する】

コード「患者は意識がなくとも最良の状態です安全・安楽に手術が受けられ、スムーズに手術が進み、術後は合

表1 学生が考察した「手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方」

	大分類	中分類	小分類	コード数
看護の目的	患者の手術や療養に取り組む姿勢を支える	患者・家族が治療を理解できるよう支援する	医師からの説明に同席し、患者や家族の理解を支援する	7
			患者や家族の理解を深めるために医師と話ができるように調整する	2
			手術に関する説明を行って不安を緩和する	14
			手術の前に手術や術後の状態について患者・家族が理解できるように説明する	6
			患者・家族が治療を理解できるよう支援する	2
		患者・家族が治療の影響を理解したことを確認した上で、意向を尊重して援助する	患者・家族が治療の影響を理解したことを確認した上で、意向を尊重して援助する	2
		手術に取り組む姿勢を支援する	患者や家族が手術を決定し主体的に取り組めるように支援する	5
			手術を納得して受けられるよう支援する	2
			術前の気持ちを整える	3
			患者が自ら健康課題に取り組めるよう支援する	1
		回復意欲を高めるよう支援する	今後の見通しをもってもらい回復意欲の向上を図る	1
			患者が安心感を得て回復へ期待が持てるように支援する	2
		手術体験の意味づけを支援する	手術を肯定的に意味づけられるよう支援する	2
			手術結果に満足できない患者の思いに対応する	1
		順調な回復過程を支援する	順調な回復過程を支援する	4
	手術に関連した合併症を予防する	手術に関連した合併症を予防する	感染を予防する	5
			手術による合併症を予防する	7
			患者の状態の観察アセスメントにより異常逸脱の早期発見に努める	5
看護の目標	手術の安全を確保する	手術の安全を確保する	手術の安全を確保する	3
			事故防止のための方策をとる	2
		事故防止する	安全確保のため、処置の確認を確実に行う	3
			事故防止に患者の協力を得る	1
			看護師の感染を防止する	1
		看護師の感染を防止する	看護師の感染を防止する	1
	安全・安楽を保障する	安全・安楽を保障する	安全・安楽を保障する	3
			患者の精神面への支援を行う	17
			家族が安心できるよう援助する	10
			手術終了をまつ家族に声をかけ、患者の状況を説明するなどして不安の軽減を図る	
			手術終了を待つ家族がゆっくりと待つことができる環境を提供する	1
			家族の不安や思いを理解しその思いに応じて家族と話をする	5
			家族の不安に対処するために術直後により多く家族と患者が対面できる体制をつくる	1
			家族が安心できるように、患者の手術後の状態を説明する	3
			術前訪問は家族を援助する内容も含めて話をして家族を支援する	3
			家族の不安の軽減のために、手術や処置の目的や今後の見通しなどがわかるように説明する	2
			家族と信頼関係を築く	1

表1 学生が考察した「手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方」(つづき)

看護の方法	患者を捉えて支援する	患者の個別性をとらえて援助する	個々の患者の不安とその緩和方法を患者との関わりなどから捉える	7
			術前に患者を理解してケアに活かす	2
			患者のニーズをアセスメントする	1
			訴えることができない患者に代わり、患者の状態を把握して管理する	4
			事前の情報から予測的に支援する	6
			患者の思いや気持ちを捉えて援助する	5
			患者・家族の不安の表出を図り、その不安の軽減に努める	6
			患者の手術に対する不安や思いに耳を傾ける	7
			多面的に患者を捉えて援助する	1
			多面的に援助する	1
	手術による社会生活への影響を把握して支援する	手術による社会生活への影響を把握して支援する	手術の影響を長期的に捉えて援助する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
			手術による社会生活への影響を把握して支援する	2
	患者の緊張を緩和する	患者の緊張を緩和する	リラックスできる環境をつくる	1
			心身の安楽を提供する	1
			患者が好む方法で緊張緩和をはかる	1
			手術室内での患者の緊張を和らげ、温かみのある態度で患者に関わる	9
			患者に適切に声をかけて不安を緩和する	8
			タッチングで不安を緩和する	1
			顔見知りの看護師が手術室で患者に関わることで、患者の不安や緊張を解く	6
			手術室での処置の際には患者に声をかけ患者の不安やとまどいが増強しないように支援する	11
			手術室での処置の際には患者に声をかけ患者の不安やとまどいが増強しないように支援する	11
			手術室での処置の際には患者に声をかけ患者の不安やとまどいが増強しないように支援する	11
看護師の姿勢	円滑な手術をマネジメントする	円滑な手術をマネジメントする	手術を受ける身体的準備を整える	3
			手術後の円滑な受け入れのために準備する	1
			執刀医の手術操作が円滑に運ぶようにする	5
			手術進行を把握して予測的に動く	3
			手術が安全・安楽で、スムーズに進むようにする	4
			手術全体を管理する	3
			他職種の手術チームメンバーがスムーズに動けるように調整する	5
			患者の全身状態を把握して管理する	3
			患者の全身状態を把握して管理する	3
			患者の全身状態を把握して管理する	3
	医療者間の連携を図る	病棟と手術室とで連携を図る	病棟と手術室とで情報を伝達する	9
			病棟と手術室が連携して個々の患者・家族にあったケアを行う	3
			患者の安全を守るために病棟と手術室が連携する	4
			手術チームメンバーとしてチーム内での情報の共有、共通理解を図る	3
			他職種と連携する	4
			手術チームメンバーとしてチーム内での情報の共有、共通理解を図る	3
			手術チームメンバーとしてチーム内での情報の共有、共通理解を図る	3
			手術チームメンバーとしてチーム内での情報の共有、共通理解を図る	3
			手術チームメンバーとしてチーム内での情報の共有、共通理解を図る	3
			手術チームメンバーとしてチーム内での情報の共有、共通理解を図る	3
	患者を支える家族機能を強化する	患者を支える家族機能を強化する	家族が患者を支えることができるように、家族を支援する	1
			手術を受ける患者にとっての家族の重要性を家族自身が理解できるように支援する	1
			家族が患者を支えることができるように、家族の不安に対応し、患者との交流の環境を整える	1
			手術を担当する看護師を知らせることで手術への不安軽減につなげる	4
			医療者の誠意を伝える	1
			治療を任せることが出来る信頼を患者から得る	4
			患者の状態を的確に判断するための知識をもつ	5
			円滑な手術に必要な知識を身につける	3
			起こり得る危険に対処する能力を培う	4
			意識のない訴えない状態であっても患者を尊重した態度で関わる	5
看護師の姿勢	倫理的姿勢をもつ	患者を尊重する	医療者中心とならずに手術を受けている患者を尊重して配慮する	2
			患者本位の誠実な医療であるかを考える	1
			患者・家族へ真摯な態度で接する	1
			より良い手術のための方策を常に考える向上心をもつ	1
			常に患者のための看護について考える	1
			患者・家族が満足するケアを実施する	1
			患者・家族が満足するケアを実施する	1
			患者・家族が満足するケアを実施する	1
			患者・家族が満足するケアを実施する	1
			患者・家族が満足するケアを実施する	1

併症が予防され順調に回復できるように支援する」など、具体性はないが、手術を受ける患者への看護の最終的な目的として順調な回復過程を支援すると記述されたものが含まれる。

2. 〔看護の目標〕

手術室実習を通して学生が考察した手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方として見出された【手術に関連した合併症を予防する】【手術の安全を確保する】【安全・安楽を保障する】【患者の精神面への支援を行う】【家族が安心できるよう援助する】の5つの大分類が〔看護の目標〕としてまとめられた。

1) 【手術に関連した合併症を予防する】

具体的な合併症として記述されていたのは、術後合併症としては「感染」、術中合併症としては「皮膚・末梢神経障害」「低体温」であり、具体的な行動としては清潔操作や体位づくり、観察による異常の早期発見が挙げられた。

2) 【手術の安全を確保する】

具体的な事故防止の方策として記述されていたのは、「ガーゼカウント」や「行為を声に出して確認する」などであり、安全の確保を重要視することまたは事故防止の方策をとることが含まれる。また、患者の安全の確保だけでなく、看護師自身の安全を守る内容である「看護師自身が血液感染を受けないようにする」ことも含まれた。

3) 【安全・安楽を保障する】

具体的な行為については記述されずに、安全・安楽を保障することを看護であると記述されたものが含まれる。

4) 【患者の精神面への支援を行う】

具体的な援助としては挙げられていないが、手術を受ける患者への精神面への支援の重要性が記述されたものが含まれる。

5) 【家族が安心できるよう援助する】

手術を待つ家族に声をかけ、手術の状況を説明したり、家族がゆっくりと待つことができる環境を整えたり、家族へも説明をするなど《家族が安心できるよう援助する》から成る。

3. 〔看護の方法〕

手術室実習を通して学生が考察した手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方として見出された【患

者を捉えて支援する】【手術による社会生活への影響を把握して支援する】【患者の緊張を緩和する】【円滑な手術をマネジメントする】【医療者間の連携を図る】【患者を支える家族機能を強化する】の6つの大分類が〔看護の方法〕としてまとめられた。

1) 【患者を捉えて支援する】

患者の個別性を捉えたり、患者の思いや気持ちを捉えたり、事前の情報から捉えたりして患者を支援する、または麻酔下で訴えることができない患者の代弁者となるために患者を捉えることが含まれる。また、患者を心身両面、多面的に、長期的に捉えて援助することを【多面的に患者を捉えて援助する】としてこの大分類に含む。

2) 【手術による社会生活への影響を把握して支援する】

患者の社会的役割や手術による社会生活への影響やそれに対する患者の思いを捉えて支援することが含まれる。

3) 【患者の緊張を緩和する】

手術室内では患者のそばにいて温かみのある態度で、優しく丁寧に声をかけ、患者に触れるなど手術室内での患者への接し方が記述され、〈患者の緊張を和らげ、温かみのある態度で患者に関わる〉〈処置の際には患者に声をかけ患者の不安やとまどいが増強しないように支援する〉〈患者に適切に声をかけて不安を緩和する〉〈タッチングで不安を緩和する〉などが含まれる。

4) 【円滑な手術をマネジメントする】

《円滑な手術をマネジメントする》ために、器械出しをスムーズに行い〈執刀医の手術操作が円滑に運ぶようにする〉、手術の進行具合を把握して必要な物品を準備するなど〈手術進行を把握して予測的に動く〉、他職種役割を把握したり人間関係に配慮したりして他職種の専門性の発揮に貢献する〈他職種の手術チームメンバーがスムーズに働けるように調整する〉などが含まれる。これらの具体的な行為の多くは患者への直接的な看護援助ではなく、他職種や環境に働きかける内容であった。

5) 【医療者間の連携を図る】

申し送りや記録で情報を伝達して、個々の患者にあったケアを提供したり、安全を守ったりする、または手術チームメンバーで情報を共有することなどが含まれる。

6) 【患者を支える家族機能を強化する】

〈手術を受ける患者にとっての家族の重要性を家族自身が理解できるよう支援する〉や〈家族が患者を支える

ことができるように、家族の不安に対応し、患者との交流の環境を整える」といった患者への支援となるよう家族へ働きかけることが含まれる。

4. 〔看護師の姿勢〕

手術室実習を通して学生が考察した手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方として見出された【患者との信頼関係を構築する】【能力・知識を身につける】【倫理的姿勢をもつ】の3つの大分類が〔看護師の姿勢〕としてまとめられた。

1) 【患者との信頼関係を構築する】

手術を担当する看護師を知らせたり、患者が治療を任せることができるよう自信を持った態度をとったり、最善をつくすことを伝えて誠意を伝えたりすることから成る。

2) 【能力・知識を身につける】

手術のリスク、患者の状態を判断する基準、疾患・解剖生理、手術手順・使用物品など患者の状態を的確に判断するための知識をもったり、起こりうる危険に対処する能力を培ったりすることから成る。

3) 【倫理的姿勢をもつ】

意識のない訴えない状態であっても患者を尊重した態度で、常に患者のために、患者・家族が満足できるように考え、よりよい手術のために向上心をもつことなどから成る。

V. 考察

1. 手術室実習を通して学生が考察した看護のあり方

手術室実習を通して学生は【患者の手術や療養に取り組む姿勢を支える】【順調な回復過程を支援する】という2つの〔看護の目的〕、【手術に関連した合併症を予防する】【手術の安全を確保する】【安全・安楽を保障する】【患者の精神面への支援を行う】【家族が安心できるよう援助する】という5つの〔看護の目標〕、【患者を捉えて支援する】【手術による社会生活への影響を把握して支援する】【患者の緊張を緩和する】【円滑な手術をマネジメントする】【医療者間の連携を図る】【患者を支える家族機能を強化する】という6つの〔看護の方法〕、【患者との信頼関係を構築する】【能力・知識を身につける】【倫理的姿勢をもつ】という3つの〔看護師の姿勢〕を「手術療法を受ける患者とその家族への看護」のあり方とし

て考察した。手術室実習を通して、学生は手術療法を受ける患者とその家族への看護が目指す目的、それを達成するための目標、具体的方法を学び、また看護を実践する上で必要とされる看護師の姿勢を捉えている。

2. 手術室実習を通して学ぶ「手術患者の主体的取り組みを支援する看護」

〔看護の目的〕である【患者の手術や療養に取り組む姿勢を支える】は、学生が手術療法を受ける患者の健康課題を「患者自らが健康回復に取り組む」と捉え、その健康課題を達成できるよう患者を支援することを学んでいるといえよう。患者や家族が医師からの説明を理解したり、手術を納得したり、意味づけたりするなどが患者のあり方として記述されており、手術という医療者主導で状況がコントロールされやすい場においても患者が健康回復の主体であることを学生が十分に捉えていることがわかる。さらに、患者の意思・意向を捉えることにとどまらず、〈手術を納得して受けられるように支援する〉〈患者や家族が手術を決定し主体的に取り組めるように支援する〉などのように、患者が治療に関連した意思決定をうまくできるように、また意思決定したことがその後の患者の主体的な取り組みにつながるよう支援することを考察する学生もいた。

また、「手術の内容によって影響を受ける身体部位、疼痛部位が異なるため、事前にどのような侵襲があるか、どこが痛むかを知っておくことで、心の準備につながり、家族も帰宅後の患者をイメージできるのできちんと説明する」という学びに示されるように、患者の主体性に注目することで、手術による影響を手術中のみに限定せず、術前・術後に広げて考え、周手術期を通しての看護を考えることにつながるであろう。これは本実習の学習課題が「手術療法を受ける患者とその家族への看護」を学ぶことであることがオリエンテーションや記録用紙の文言などから学生に十分伝わったことで学びが強化されたとも考えられる。

大谷ら²⁾の「手術室見学実習における学び」の報告では、受け持ち患者とともに行動する受け持ち実習の学生は術後の看護援助の必要性を学んでおり、看護師と行動をともにする実習では術中の看護に学びがとどまっていたとしている。本実習においても、実習施設や受け持ち患者との関わり方など実習方法の違いで学生の学びに差が

あることが考えられるが、本研究ではそこまであきらかにしておらず、今後の課題といえよう。

3. 手術室実習を通して学ぶ「順調な回復過程を支援する看護」

もう1つの〔看護の目的〕である【順調な回復過程を支援する】は、具体的には「患者は意識がなくとも、最良の状態で安全・安楽に手術が受けられ、……順調に回復できるように支援する」「術中の無防備な患者にかわり、生命維持の管理、異常の早期発見……急性期を無事乗り越えられるように支援する」などと記述され、コントロールが及ばない状況にある患者に代わって患者の生命や健康を守る責任を看護師が負うことを学生が捉えているといえる。これは、実際に手術室で麻酔がかけられ意識のない患者を目にしたことで実感できた学びであろう。

しかしながら、【順調な回復過程を支援する】のコード数は4つであり、これを達成するための〔看護の目標〕と位置づけられる【手術に関連した合併症を予防する】【手術の安全を確保する】【安全・安楽を保障する】を含めても34であり、【患者の手術や療養に取り組む姿勢を支える】のコード数50と比較しても少ない。順調な回復過程を阻害する合併症や事故を防ぐ看護は手術室実習において直接見学することができる看護であるにもかかわらず考察として記述されにくい。これは、学生は「手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方」として、いわゆる身体的な回復を支援する看護より患者の心のあり方を支援する看護を捉える傾向にあるからともいえよう。また、手術室実習で身体的なケアを学生が実施する機会をもてないことが関連しているかもしれない。

4. 手術室実習を通して学ぶ「多面的に支援すること」

【手術に関連した合併症を予防する】【手術の安全を確保する】【患者の精神面への支援を行う】【手術による社会生活への影響を把握して支援する】は健康回復のために受ける治療である手術のリスクや影響に学生が気づき、そのリスクや影響を踏まえて看護を考察できているといえよう。また、手術による影響を身体面、精神面、社会生活面においても捉え、多面的に支援が必要であることを学習している。

しかしながら、患者の社会生活に言及したコードは「手術で中断した社会的役割を早く取り戻すことへのあせりや役割の変更に関する心配など壮年期の患者が感じやすい思いを

捉える」などの2つであった。これは手術が患者の社会生活に与える影響を捉えて記述した学生が数少なく、さらに周手術期看護の役割として患者の社会生活を支援することを考察して記述した学生がいなかったことを示す。したがって、本実習では手術療法を受ける患者の社会生活を支援する看護について学ぶことが難しいと考えられる。

5. 手術室実習で直接援助したことから学ぶ「緊張緩和の援助」

【患者の緊張を緩和する】では「麻酔導入の際に声をかける」「笑顔で……」「手を握って……」「常にそばにすることを伝える」など具体的な援助方法を学生が挙げており、緊張を緩和することの重要性を理解した上で実践的にも考えることができていた。見学中心の実習にあっても学生自身が「そばにいる」「声をかける」「タッチングする」など患者の緊張を緩和する援助が実際に提供できた、もしくはできると考えたことから学びが深められたと考えられる。酒井ら³⁾は、手術室入室実習で学生が患者へ直接援助する体験から、葛藤や実感、満足感や情けなさ、残念さなどを感じ、このような思いを体験することが、感性を育て、学習における意味や価値に気づかせると報告しているように、本実習における学生も実際の援助場面で様々な感情が湧き上がり、【患者の緊張を緩和する】重要性やその具体的方法を学んだのであろう。

6. 手術室実習を通して学ぶ「家族への援助」

【家族が安心できるよう援助する】は学生が家族をケアの対象者として捉えて援助することを、【患者を支える家族機能を強化する】は患者を支える人として家族を支援する重要性を学生が捉えているといえよう。これは、実習記録用紙に「患者と家族への看護のあり方」と家族をはっきりと明示していることから学生の意識が喚起され、家族への援助を考察するに至ったと考えられる。また、家族を援助する方法を「手術終了を待つ家族へ声をかける」「ゆっくり待つことのできる環境を提供する」「術前訪問で家族向けに話しをする」など具体的に記述していた。これは手術の際にはほとんどの患者の家族が病院を訪れることから、学生が家族を目にする、もしくは援助を提供する機会をもてたことから、学生が具体的に考えることができたのであろう。

7. 手術室実習を通して学ぶ「手術看護の専門性」

佐藤ら⁴⁾は手術看護に携わる看護師が認識する手術看護の専門性を特徴づける側面として「専門的知識に裏付けられた行動」「チームの一員でかつ調整役」「マネジメント能力」の3側面を見いだしており、本研究においても、学生がこの3側面と似通った【能力・知識を身につける】、【医療者間の連携を図る】、【円滑な手術をマネジメントする】を手術療法を受ける患者の看護のあり方として考察している。これは、1日という短い実習であっても、学生が手術看護のその特徴を十分に学ぶということを示す。

8. 今後の実習指導への示唆

「手術療法を受ける患者とその家族への看護を学ぶ」という手術室実習の学習課題を学生が理解したことで、術中に限らない看護や家族への看護を学んでいたことから、今後もさらに、学生に実習のねらいや課題が十分伝わるように指導を工夫すべきである。

また、緊張を緩和する援助、家族への援助のように、学生が患者や家族に直接的に援助を実践することで学びが深まることを念頭に、合併症予防などの身体的ケアを含めたさまざまな援助を学生が実践できる機会を開拓することに努めるべきであろう。また、手術を受ける患者や家族の社会生活を捉え、支援することの学びを手術室実習以外の機会学べているのかを確認し、必要があればその学びを強化する必要がある。

VI. まとめ

手術室実習を通して学生が考察した「手術療法を受ける患者とその家族への看護のあり方」を分析した結果、【患者の手術や療養に取り組む姿勢を支える】【順調な回復過程を支援する】という2つの〔看護の目的〕、【手術に関連した合併症を予防する】【手術の安全を確保する】【安全・安楽を保障する】【患者の精神面への支援を行う】【家族が安心できるよう援助する】という5つの〔看護の目標〕、【患者を捉えて支援する】【手術による社会生活への影響を把握して支援する】【患者の緊張を緩和する】【円滑な手術をマネジメントする】【医療者間の連携を図る】【患者を支える家族機能を強化する】という6つの〔看護の方法〕、【患者との信頼関係を構築する】【能力・知識を身につける】【倫理的姿勢をもつ】という

3つの〔看護師の姿勢〕が見いだされた。

手術室実習において学生は、患者の手術や療養に取り組む主体性に注目して考察を深め、緊張を緩和する援助や家族への援助については具体的な方法を学んでいた。

しかし、合併症予防などを含む順調な回復を支援する看護は、患者の主体性を支援する看護に比べて考察されにくく、患者の社会生活についての考察も少なかった。

文献

- 1) 北村直子, 奥村美奈子, 兼松恵子, 他: 手術室実習を通しての学生の学び 第2報 ―学生が捉えた手術室で行われていた看護―, 岐阜県立看護大学紀要, 4(1); 92-98, 2004.
- 2) 大谷則子, 堀之内若名, 中井祐子, 他: 手術室見学実習における学び ―二つの実習形態の比較検討による考察―, OPE nursing, 21(6); 98-108, 2006.
- 3) 酒井明子, 高柳智子, 丸橋佐和子: 周手術期看護における見学と実習のレポート内容分析による学習効果の検討, 復位医科大学研究雑誌, 1(2); 313-325, 2000.
- 4) 佐藤紀子, 若狭紅子, 土倉愛子, 他: 手術看護の専門性とその獲得過程に関する研究, OPE nursing, 19(1); 34-42, 2004.

(受稿日 平成18年12月6日)

(採用日 平成19年1月31日)